

日本基督教団

第 39 号

## 兵庫教区 震災ニュース

発行者: 阪神・淡路大震災対策特設委員会委員長 市川 哲

〒658-0054 神戸市東灘区御影中町 2-3-23

TEL.078-856-4127/FAX.078-856-4128

「兵庫県南部大地震 記念の日」 追悼礼拝

二〇二二年一月十七日(月) 午後六時 YouTube によるライブ配信

## 説教 『人が変えられる場所』

小林よう子(八戸小中野教会)

聖書

ルカによる福音書一九・一〇

(ザアカイの物語)

「ここも神のみ国なれば」

(讚美歌 I 九〇)

「はじめの一步」

(詞: 新沢としひこ)

曲: 中川ひろたか

「主が受け入れてくださるから」

(讚美歌 21 五四二)

青森県八戸市にある八戸小中野教会で牧師をしている小林よう子と申します。今日は兵庫教区の「兵庫県南部大地震記念の日」の追悼礼拝を、神戸から遠く離れた八戸からの配信でお話しさせていただきます。兵庫教区は、このためにわざわざ一人のスタッフを派遣してくださいました。二十七年目の記念の追悼礼拝に、

どうして青森にいる者が話をするのかと、多くの方が不思議に思われていることと思います。

二十七年前の地震では、多くの方々が亡くなりました。突然命を絶たれた人々のことを忘れないように心に刻み続けることは、大切なことです。同時に、この地震によって大事な人を失い、住む場所を失い、仕事を失い、人生を突然大きく変えられた人々が大勢あります。明日も変わらずに続くと思っていた日常生活を送っていた場所から、突然出て行かざるをえなくなった多くの人があり、生き方を変えなければならなくなりました。わたしは二十七年前、連れ合いの小林健志が牧師をしていた神戸市灘区大和町にある神和教会で、地震を経験しました。神和教会はこの地震で全壊し、

大和町では近隣に住む多くの方が亡くなりました。地震の後、被災した教会にいて、わたしは思いもよらないたくさんの方の出来事を経験し、多くの人たちと出会い、そして二年後、突然の夫の死によって、神戸を離れることになりました。その時には、まさか自分が牧師として働くことになると思ってもいませんでしたし、こんな本州の北の端で生活する日が来るとも思っていませんでした。でも、それはみんな、震災を経験したことからは始まったのです。



わたしが話すのは「追悼」というよりも、「震災の後、神戸にいる事が出来なかった者がどう生きたか」という物語です。今、震災のことを思っただけで、一番辛いと感じるのは、神戸に居続けられなかったことです。震災直後に一緒に困難な時を過ごし、一緒に耐え、一緒に生きた人たちが、その場所から離れざるをえなかったこと。そして、あの時生きた場所のその後を見られなかったことが辛かった。別に、今行きたいというわけではありません。むしろ、今となっては行くことの方が辛いでしょう。神戸の物語はもう、わたしとは別の物語だからです。けれども、震災で経験したことの中から、わたしはどこに行っても生きる場が与えられるという希望も与えられ、神戸とは別の物語を生きようと思えるようになりまし。今日はそのことをお話ししたいと思います。

一九九五年一月十七日の未明。

それは、真つ暗な中での突然の激しい揺れでした。命への配慮などみじんもない、容赦のない、残酷

な揺れの中、初めて「死ぬかもしれない」と感じました。そして実際、あの瞬間にたくさんの命が奪われていたのです。気がつくと、真つ暗な中、車のクラクションの音が鳴り響いていました。近くにある二階建ての建物が倒壊し、一階の車庫にあった車が押しつぶされて鳴り出した音でした。今が何時なのかもわからない中、すっかり様変わりして何だかわからない障害物だらけの部屋から、声を掛け合って家族で脱出しました。当時、八才の長男、四才のふたごの娘たち、二才の末娘と夫とわたし、六人家族で牧師館に住んでいました。続く余震でたびたび身をすくめながら、散乱したものでいっぱい階段や玄関から外へ出て行きました。牧師館と隣の長屋との間の塀がなくなっ



て、そこに、パジャマを着た人たち何人か呆然と立っついてびっくりました。倒壊した長屋から、出てきたばかりの人たちだったのです。

教会は、海と山のちょうど中間くらいの所、地震による建物の倒壊率が高かった国道二号線とJR神戸線の間がありました。教会周辺の八割以上の建物が倒壊し、教会堂も全壊しました。近隣で何人の方が亡くなり、教会員と教会学校に来ていた子どもも亡くなりました。もちろん、電気、水道、ガスなどのライフラインの復旧が困難な地域で、どこに行くにも、倒壊した家屋を踏み越えていかなければならないような場所でした。そのため幼かった子どもたちは大阪の実家に疎開させ、四月まで家族が分かれて暮らしました。春までの三ヶ月、被災地神戸は時間が止まったように、何も変わりませんでした。何もかもが混乱し、その日一日どうやって生きていけばいいのかもわからないような毎日でした。歩いて来られる教会員を中心に日曜日ご

とに礼拝を守り、集まっては持ち寄った食事をみんなで分け合っ

て食べました。そんな中で、残って無事だった牧師館を開放して、行き場の無い子どもたちに声をかけ、自主学校を始めました。先ほど歌った讃美歌「ここも神のみくになれば」は、この地震を経験して、夫の小林がまず一番に歌いたいと話していた讃美歌です。最初の礼拝は、震災ですぐにされた地域を目の前にした野外礼拝でした。そこで彼は「神が造られた世界は美しい」という讃美歌を歌いたと言ったのです。初めは何を考えているのだろう、と思いましたが、だんだんこの讃美歌はわたしにとっても大事な歌になりました。震災の後、多くの人が「なぜ神戸でこんな大地震が起こったのか」と問いました。けれども答えはありません。わたしたちに、神がなさることの意味は分からないのです。けれども、わたしたちは神が造られた世界の中で生かされている。生き残ったわたしたちには、与えられた命がある。命あるわたしたちを、

神は必ず導いてくださる。その信仰によって、わたしたちはどう生きていけばいいのかを、神に問いながら歩んでいくのだと考えるようになりました。

春に仮設会堂が建ち、牧師館に子どもたちを戻す事が出来ても、次々に課題が押し寄せてきました。学校の校庭も公園も、空いた場所にはすべて仮設住宅が建てられ、プールや体育館や児童館など、子どもたちの居場所は閉鎖されたり避難所になっていました。そんな子どもたちのために仮設会堂を使って夏休みの間、ほぼ毎日夏期学校をしました。住む家がなくなくなった教会員たちと教会敷地内に仮設住宅を建てたり、多くの教会が被災した教区の活動や、会堂再建の働きなどで立ち止まることはありませんでした。訪問してくださる数えきれないほどたくさんの人たちと出会い、また教会のつながりの広さ、覚えられ祈られる励ましの大きさ、さまざまに支えの力強さを経験しました。そして、震災二年後に夫が突然亡くなり、わたしは神戸を去る

ことになりました。夫が神戸にある教会の牧師をしていたので、わたしはそこにいたのです。夫の死によって、わたしにはそこにいる理由がなくなりました。ここにはいられない。でも、行かなければならない場所もない。自分がこれからどうしたいのか何も描けず、頭の中はまっ白でした。ただ、いたい場所はありません。わたしは教会という場所にいたかったのです。

震災後の教会において、そこで本当にたくさんの人々と出会い、共に過ごしました。被災して会堂が全壊した教会は、初めは残った牧師館を拠点とし、仮設会堂を得てからはそこで活動を続けました。訪ねて来る人を、教会ではだれでも受け入れました。特に震災直後の自主学校や夏休み中の夏期学校をしたので、遊ぶ場がなく、居場所の無い子どもたちが毎日やってきました。そして子どもたちは何人か集まるだけでびっくりするほど元気になり、それは活発に遊びだしました。そんな子どもたちの姿を見て大人たちはとて

も励まされました。住む場所がなくなった人、仕事を失った人、ボランティアをしたい人、知り合いを捜しに来た人、いろいろな人が来て、教会で一緒に礼拝し、共に食卓を囲みました。そして、そこで受け入れられ、受けとめられる時間を過ごした人たちが、変えられていく姿を見ました。うなだれていた人が顔を上げ、表情がぼんやりしていた人が、自分の意志を持った顔をするようになり、じっとしていた人が動き出す。そして、教会で人が変えられる姿を見るたびに、わたしは自分が元気をもらい、希望を感じることが出来ました。教会は、確かに神の力が生きて働いている場所でした。これから自分が一体何処でどう生きていけばいいのかが分からなくなってしまう時、教会において、教会で変えられていく人の姿をずっと見ていたい、と思ったのです。

けれどもその一方で、震災後のそんな教会が、本来の教会の人たちに理解されていなかったということも知らされました。長く交

通機関が使えなかったために、何ヶ月も自分の教会に来ることができなかった教会員の中には、久しぶりに教会に来て、あまりの変わりように驚いた人たちがありました。震災後にわたしたちがやってきたことが、教会の人たちに喜ばれていたわけではない、ということだったのです。あれから三十年近くがたって、わたしもさまざまな経験をし、今ではそのときの人たちが感じた戸惑いを少し分かる気もします。何より、そこに居続けていたわたしたちは、自分たちが経験していることを、うまく伝えることができなかったと思います。でも、その力がありませんでした。

わたしは神戸にいる理由がなくなり、神戸を去ることになりました。これからどこに行き、何をして生きていくのか、最初何も見えませんでした。でも、残された四人の子どもたちを養わなければならぬというとても現実的な問題は、待ったなしでした。もともとわたしは学校の教師でした。普通に考えたら、再び教師と

して働くのが自然なことだったでしょう。教師という仕事がいやではありませんでした。けれども、全く心が動かないのです。ただ、教会にいたいと思えました。本当に自分のことを受け入れてもらえた人は、変わることができる。そんな、人を生かす神の力が働く場所でもわたしも生きていたい。それだけでした。「教会にいる」自分が一体何をしているのかさえ、見えませんでした。だんだんと、その教会は神戸でなくてもいいのだ、と思えるようにはなりませんでした。そういう気持ちになれた時、離れたくないと思った神戸から出て行けると思いました。この場所の未来は、ここにいて、ここで生きていく人たちに託していけばいいのだ、と納得できるようになりました。神の力が働くのを見たいという思いが、そういう場所にいたいという思いさえあれば、きっと生きていく道は開かれる、と思えるようになりました。

ザアカイに出会ったイエスは、彼の名前を呼んで声をかけました。「ザアカイ、急いで降りて来

なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」ザアカイは、人々から罪深い男と思われていました。うわさのイエスがどんな人か見たいと思いましたが、だれも助けてくれませんでした。ザアカイが本当はどんな人なのか、何を望んで生きているのか、だれも気にしていなかったのです。けれどもイエスは違いました。イエスはザアカイに声をかけ、自ら世話になりたいと申し出ました。ザアカイは登りたいいちじく桑の木から急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えました。そして、心から自分がやりたいと思っていたこと、言いたいと願っていたことを言う事が出来ました。イエスは言われました。「今日、救いがこの家をおとずれた。この人もアブラハムの子なのだから。」イエスに無条件で受け入れられて、ザアカイが活き活きと生き始めた場面です。イエスを伝える教会は、こんなふうに人が変えられる場所になることができます。それはわたしが生きていく希望になりました。

牧師になりたいと思つたわけ

ではないのです。「教会にいたい」という不純な動機で神学部に入りました。けれども、勉強していつか教会で働けるようになりたいと思う、と子どもたちに伝えたい、思いがけないことにみんな手を叩いて喜んでくれたのです。神戸には戻れないし、この先どこに行くかも分からないよ、と言いました。子どもたちも教会にいられるならどこに行つてもいい、と言ってくれました。震災とその後、様々な経験を通して、子どもたちも教会がどういう場所なのかということ、言葉にできなくても感じ取っていたと思えました。

編入学した神学部での学びは、とても楽しいものでした。そして、震災の後に出会い、大阪で迎えてくれた人たちが、そんなわたしを励ましてくれました。小林があるとき、こんなことを言っていました。「本当に出会うことを願って過ごしていれば、出会いは自然に与えられる時が来る。自分から無理に動かなくても大丈夫なんだ。」そして、わたしが生きる道は開か

れていきました。

神戸でわたしが身をもって知ったこと。それは、傷つき、大事なものを失った人を、神が受け入れ、そのまま受けとめてくださるということ。そして、自分そのまま受け入れられていると分かった時、人は変えられるということ。教会はそんな場になれるということ。そうなりたくて願ってさえいければ。その願いをできるだけ多くの人と共有したいと思えました。そんな教会にいたいという願いを持って歩み出してから、わたしは神の力が人の上に働く瞬間に、幾度も立ち会わせていた。ただ、恵みを経験させていた。今日に至っています。

今日は二十七年前に起こった地震を思い起こし、亡くなった方々を追悼する日ですが、それは何のためかという、悼み、悲しむだけではありません。残された者たちがどのように生きていくかを考えるためだと思ふのです。神戸では、震災直後から住む人の入れ変わりが急激に進みました。震災の被害によって神戸にいら

れなくなつた人たちは次々になくなり、代わりに震災を経験していない人たちがどんどん入って来ました。震災当時、そこにいて被災の経験をした人たちは、兵庫教区の教会の中でもすでに少数になつているかもしれません。

けれども二十七年前に起こつた震災は、今、兵庫教区におられるみなさんの物語です。かつて多くの人が亡くなり、傷つき、人生を変えられたその場所に、今生きているのはみなさんだからです。教区としてこうして記念の時を持つのは、今ここで生きている者たちが、過去にここで起こつたことを覚え、これからどのように生きていくかを考えるためではないかと思うのです。

「はじめの一步」という歌は、震災後に神戸で始まつた、子どもたちを招いた、子どもたちを追悼するコンサートで覚えました。避難所になつた小学校の教室の黒板に歌詞が書かれていたそうです。そして、多くの被災した人々を励ました歌でした。今わたしが働く八戸小中野教会は、幼稚園と

共に歩んで来た教会です。ここに来て、思いがけなく再びこの歌と出会いました。そして、神戸から始まつた歩みが、ここに続いていったのだなど不思議な気持ちになりました。

二十七年前に起こつた地震で、たくさんの方が大切なものを失い、予想もしなかつた道へと歩み出させられました。けれどもどんなことになつても、命がある限り、わたしたちは生きていかなければなりません。なぜなら生きているのはわたしたちが選んだからではなく、命は神から与えられたものだからです。どのような中も生きていくことになるのかは、わたしたちには分かりません。ただ、その命をどのように生きていくのかを、神に尋ね求めていくことはできます。そしてそうやって進んで行くこうとするとき、神は道を備えてくださると信じます。何より、どんな時にも神が自分を受け入れ、支えていてくださると信じられる時、人は変えられるのです。自分から命の道へと踏み出せるようになるのです。教会がそんな、

人が変えられる場所になることができるように、その願いを多くの人と共有しながら、わたしは今ここ、青森県八戸市の小中野という地域で、歩んでいきたいと願っています。

#### 祈り

すべての命の源である神さま  
今日は二十七年前に起こつた地震による犠牲者を追悼する礼拝の時を、このような形で持たせていただいたことを感謝します。

亡くなられた方達を思うときは、残された者として、またその後を生きる者として、どのように生きていけばいいのかを考えると、でもあります。これからも続くと思われていた日常を突然断たれたたくさんの人たちがあります。けれども、あなたから与えられた命がある限り、わたしたちの生きる道はあなたによって導かれていくことを信じます。命の源であるあなたへと心を向け、共に生かされていく人々と生きる道へと導いてください。二十七年前の出来事の傷を今も負う人々、その後

に起こつた多くの災害で傷ついた人々の歩みを、これからも支え、導いてください。ここで過去に起こつた震災を経験しておらずに今、ここに生きる人々に、お互いを思いやり合い、受け入れ合いながら共に歩む道を与えてください。

この祈りを、わたしたちの主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。

#### 終禱

二十七年前の地震によって召された人々、人生を大きく変えられた人々、そしてその場所に今生かされている人々、神はすべての命を愛しておられます。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、わたしたちと共にありますように。

